

## 戦前の回顧

谷本 揆一

私が庭球部長になったのは昭和十三年だと思いが定かではない。大正九年三高に入学し三高、東大の学生時代には下手なテニスに熱中していた。硬式テニスが旧制高校あたりまで広く普及したのがこの頃で、学友に俵積雄君（東大在学中デヴィスカップ選手になる）がいて、上京するや否や早稲田の名手阿部選手を破ったりしたので、テニスの試合をよく観戦に出かけた。それが尾を引いて田園コロシウムあたりで、山崎東君と顔なじみになったのが部長に引き出されるに至った経路らしい。

さて昭和十二年頃、農大は青山常磐松の旧校舎であり、校舎から青山南町の方へ一段下った所に、割合立派な講堂と図書館や化学教室との間に、一面のテニスコートがあった。後年の学長三浦先生や図書館の大野さん等がこ

こで大いに活躍されたものと聞かされた。

私の就任当時のメンバーは秋山、鈴木、井本、黒田、大森、森下、山田、調、千代、大村等々多士済々で、青山学院との定期戦に堂々二連勝したように思う。当時は現在のように大学の数も多くなく、勝負にもそれ程こだわらず、楽しい試合だったように思われるが、選手諸君はやはりそんなに呑気ではなかったにちがいない。皆真面目ないゝ学生達ばかりであったので、庭球部の雰囲気は非常によかった。よく学校運動部等に見られる先輩後輩の階級的差別はなく、和気あいあいであった。

学生スポーツはこれではないか。スポーツのエリート養成が目的ではない。近頃の教育界ではエリートが嫌われ学業の優劣を区別することすら差別教育だとされる。然し運動競技の世界ではこれと全く反対に、限られた少数のエリート作りに没頭している、私には理解し難いことである。学問の世界と運動競技の世界とを取りちがえて居るとしか私には思えない。もともと競技の専門的選手養成を目的とするところもあるであろうが、それは別の問題であり、一般大学のスポーツ部は大らかな

人格形成にふさわしい所であつてほしい。

青山時代の庭球部も数年の後、戦火によつて校舎は焼失し、学生の多数が戦地に赴き、わが庭球部員も散り散りになつて了つた。その或日黒田君から南方の島で僚友大森君とはからずも出会つたとの喜びの葉書を貰つたのは嬉しかった。然しその大森君は遂に帰らなかつた。その他にも幾人かの悲報を聞き悲しみに堪えなかつた。戦後農大は目覚ましい復興発展ぶりであるが、常磐松時代を回顧する時、予算や設備の貧しさの中でよくも学生の自発的運営だけによつて見事に切り抜けて来たものである。小田原で立派なコートを借りて合宿したり、青山通りの「いろは」で部の懇親会が開かれたりしたのは先輩の方々の援助を物語るが、学生の能力を高く評価出来たことは私の最大の喜びであつた。

### 特別寄稿

## 庭球部七十五年の歩みに際し憶う

金木良三

発足以来七十五年を迎えたと言う庭球部。明治の末の発足となる。これを記念する何等かの記念事業を考へるのも当然であり、七十五年史を残そうとする企画も当然生まれる筈である。

前部長としての執筆を依頼されてから数ヶ月がたち、愈々切羽つまつてのペンをとるため「躍進」の前身、「庭球部報」を現部長檜垣先生から借り受けた。庭球部報第一号、懐しい。一九六三年十一月十五日発行の第一号は、タイプの謄写板刷りで始まつていた。表紙も手製、綴じも手製、何の飾りもない第一号は、志賀高原、夏の合宿の感想、反省で占められた、たった十五頁のパンフレットである。今から十四年前、部長の職を頂いて五年が経過していると、巻頭言に替えた部長挨拶に記載され



っている限り、疲れを感じず、体操は甲をもらっていた。正課の剣道も二段を頂いた。大学（予科）に入ってから、卓球部に籍を置き、朝七時に登校して、卓球室を一人で床磨きをし、先輩のウケが良く、手をとって指導して頂いた。ロングが好きで、台から三〇四米離れての打ち合いをするときの爽快さを今でも思い出す。

しかし、予科を終了する昭和十八年、同級生の大方が学徒動員で出陣、残された者は、専ら農村での野良仕事に勤労者として動員された。都会生れの都会育ちであった私も、終戦迄の三ケ年、飯が喰わせて貰える農村にしがみつき、お蔭で半人前の百姓仕事は体験することが出来た。

戦後の食料不足を、農村で習い憶えた百姓技術で、空地を農地として増産することに興味を持ち、欲と二人連れで農事に専念した。

おかげで三十過ぎから、筋肉リュウマチに苦しまされ、バケツ一杯の水も良く運べぬ体となって仕舞った。三十六〜三十七歳頃には大分リュウマチも良くなってはいたが、肩や腰に力のかかる事は厳禁であり、ラケットを振

り廻すことなど思いもよらぬ事であった。  
ラケットをよう持たなかった部長の告白を信じて頂ければ幸いである。

× × × × ×

七十五年史に残す原稿としては、余りに自己中心的な随想録ではある。三浦先生、大野先生、田辺先生、谷本先生方、四部長さんはラケットを握られた筈である。平松先生は恐らく殆んどラケットを握られなかったのではなからうか？ 少なくとも、テニスをなさるタイプではなかったと思う。

しかし、ラケットの握れる部長は楽しかったと思う。私の後任、檜垣部長が素晴らしいプレーヤーであり、スポーツマンで、コートに毎日出ておられると聞き、大変嬉しく推薦した立場から自慢に思っている。

## 特別寄稿

## 私の記憶

元日本庭球協会事務局長 久保圭之助

私が早大庭球部に入部したのは大正六年の秋で、当時はまだ早大庭球部（勿論軟式庭球）の全国的にも黄金時代であつただけ選手自身にもなく、名手がおろ、確か私が大阪の中之島公園を中心として、いろんな先輩からテニスというものを教わつた。その一人に大藪常次郎さんという早大庭球部の先輩から同じテニスをやるなら早稲田に入らんかと勧められたのも、上京という当時として夢のような野心の達成に努力したからである。入学してみると早大の練習は厳しいといわれていたが、別に大した苦勞も感ぜず夢中で練習したもので、白いユニフォームにWASEDAというマークの入つた一枚のユニフォームに希望の一部を驚喜したことは、この年になつても未だ忘れていない。当時は春秋の高師高商の対校試合

が済むと一応シーズンオフということになる。それからがわれわれ新米のペイ／＼連中を育成のため、チームの大將組を除いた副將以下の人達のチームに組入れられ、当時の在京の強い学校との対校試合に参加させられた。

当時部にはその戦績を記載した記録帳が保存されていた。卒業後も私の手元に預っていたのが、戦災のため先輩の福田さんの手許で焼失してしまったのは今でも遺憾に堪えない。当時二流校といわれていた学校でも明大とか、農大（当時は青山の今の青山学院の隣りにあつた農業専門学校）は他を圧しており、私も対戦に参加して苦戦したことを未だに脳裡から忘れていない。その農大の大將、私は北野選手と聞いていたが、この人は非常な名手で、他校を圧していたことを憶えている。殆んど最終戦は日没に近かくやつと勝たして貰つた記憶がある。農大は今年で七十五周年を迎えて部史が発行されると聞いて戦後いろいろお世話になつたので感謝の意を表する意味で一筆書かして貰つたことを喜んでゐる。農大庭球部は明治三十七年というから転た感慨に堪えない。

確かこの学校が硬式を採用したのは大正十一年からと

きいた。私が庭球協会の事務局を預つてから、事務所を銀座尾張町、銀座四丁目の角の安藤七宝店の二階で、この頃は関東学連も同時に出来て、農大は三部でも強かったことを知っている。恐らく軟庭出身の人達が多かったためである。軟式時代の対校戦のやり方は七組同士でどちらかが二組を破ると優退する。優退組がある間は同じやり方で再優退組ができ、それがなくなつた学校が敗戦ということになる。ゲームは五回ゲームであつたが再優退がつきる迄は矢張り没近くなる。私等の時代では宗教大（東洋大）、東洋協会（拓殖大学）外国語学校、学習院は特に頭ぬけて強く、早稲田の新人組も当時福羽という選手のため負かされたことがあつた。

昭和廿四年世田谷の現在のところへ移転した私は区へ体育係であつた望月久次君と相談して世田谷庭球協会をつつた。私の考えでは区の方は社会教育のための予算であつたが適当に決算して明治、成城、農大、武蔵工大其他の六大学の強化とジュニア、高校生の強化を計画したことがある。当時は私もテニスをやり身体にも自信があつたので、農大のマネージャーであつた宇都野、水

谷、宇野、最後は三浦晴男君らの旺んな斡旋もあり明治や農大のコートで練習会や指導会などを続けた。そして、会場用の農大のコートを自分達で手入れをした。またトーナメントも学芸大の世田谷のコートを借りて、一時東京区対抗で六度の優勝の記録をつくつたこともあると記憶している。特に僭越であつたが石川君がグラスコートを卒業論文にするというので意見を述べさせて貰つたこともある。年代は忘れたが農大一高から来た玉川君はなか／＼、勘もいゝので是非一流のトーナメントプレーヤーになつて欲しいと思つたこともある。

今から思うと農大コーチの時分には夏カルピスを寄付して貰つてがぶ飲みしたこともあつた。

何といつても学校の性質上みなさんが農事実習や実験の余暇を割いてよく練習してくれたと喜んだり、残念がたりしたこともある。宇都野などまた焼ちゅう醸造家でありながら、熊本国体のときはわざ／＼来て一緒に宿泊を共にしたり、私が鹿児島へ出張の折り、駅まできて自家用一升瓶を汽車中で飲めと寄贈してくれた好意や宇野君が海外出張の余暇や特に私のために日本国内の主た

るコート hardness を計ったり、土の性質の実験をして参考資料をつくってくれた功績は感謝以外に言葉はない。今度の記念史はみんなの努力で立派な参考資料となることを期待しているものである。

特別寄稿

## 農大庭球部七十五年史に寄せて

青山学院大学庭球部OB会

会長 森岡 博

農大庭球部が創立七十五年をお迎えなさいましたことを、心からお祝い申し上げます。

ひと口に七十五年と申しますが、これはなかなかの年月でありまして、仮りに創立者が代々その子孫を、農大庭球部に入れたとしたら、曾孫（ヒマゴ）が今頃部員として、毎日しごかれていく勘定になります。

さきごろ七十五年史を作るので、農大、青学定期戦の思い出と言ったようなことの寄稿の御依頼が、何となく、

あまり適役でない私のところに廻って参りまして、実はギクリとしたのです。ギクリのわけは、そちら様では、七十五年史が出来ようと言うのに、こちらは、部史を作ろうかと言う段になると、記録の準備がないため、大変な困難にぶち当たるだろうと言うことであります。

かねがね、そちら様の記録整備の立派さには、感心をしていたのですが、改めて尊敬と半ば羨望の念を禁じ得ないところです。

いったい、テニスの成績は別としても、記録の整備の面で、どうしてこんな差がついてしまうのだろう。恐らく、それぞれが取組んでいる学問が、片や事実と、それらの正確な記録の積み上げを尊しとする自然科学に属する、に對し、こなた、ややほんわかとした、人文科学に属する、といった基盤の違いが、異った風土を作ってきたに違いないと、あまり取組みもしない私が、不遜な推論をして、自ら慰めている次第なのです。

当方は古老によりますと、大正十四年頃に硬式テニス同好の士、数人が寄って、部としての活動を始めたそうですので、単純明快に昭和五十五年が、創立五十五年と

言うことにしたいと思っております。部史でも作ります際には、記録やお智恵を、お借りすることになるかと思いますが、その節はよろしくお願い致します。

歴史には栄枯盛衰はつきものですが、農大、青学定期戦も、或る時期に盛り上がりがあったり、又しぼんだりして来たようです。大把みにして、戦前が定期戦としては、盛の時代で、この時代は概して農大優勢、戦後は定期戦としては、衰の時代で青山優勢ということかと思えます。私は部に属した期間が短く、当時、最大のイベントであった農大戦出場等、思いも寄らぬことでしたので、鮮烈な想い出といったものも少ないのですが、昭和八年は珍らしく伯仲した時期であったようで、我が方、川村選手が顔面蒼白、死闘の末、黒瀬選手に辛勝し、この貴重なポイントで春の惨敗の雪辱を果したことを覚えておりますが、私が最上級の翌九年は腑甲斐ない敗け方をした筈で、思い出ずるもの更になしです。

当時私の記憶に鮮かに残っているプレーヤーは、小佐々選手です。彼の厚いグリップから繰り出す猛烈なフォアの打球は手におえないものだったと思えます。その頃、

バックを両手打ちする着想があったなら、恐らく、一世を風靡する大選手になられたに違いないと思っておりますが、数十年の歳月をおいて彼の打法が、ボルグに再生されている感があるのは面白いことです。

最近では学生庭球も、リーグ戦に重点が移っているようです。今更これを軽視することもありませんが、永い伝統のある定期戦などは、もつとも大事にして、これあるが為に備え、これあるが為に努め、歴史を飾る為に若い情熱と精力を傾注するような気風を培ってゆこうではありませんか。

貴重な部史を拙文で汚させて頂く光栄を、感謝致します。



## 特別寄稿

## 懐しい思い出

東家の主 長谷川欽一

農大庭球部七十五年お目出度うございます。私は農大の卒業生ではありませんが、庭球部の流れの一時期に、多少でもお役に立てたかと思われる節があった為か、何か思出をとの事でしたので、四十余年以上も前の事として、これとって現在の部員の方々に面白いと感じていただける話も思い出せませんが、御依頼の趣旨に添って書綴って見ます。

現在はもう、その商売はやって居りませんが、神奈川県藤沢市鵜沼海岸に、「あづまや」という旅館を経営して居りました。

その当時、鎌倉トーナメントとって全国でも数少ない硬球の試合が鎌倉の海浜ホテルのコートで開催されて居て、たまたま参加者も増えて期日的にそのコート（二

面）だけでは賄い切れなくなり、私の家のコートでも準決勝までの試合を賄う様になりました。

その関係か、東京の大学の庭球部の合宿が、春、冬の時期に持たれる様になりました。

農大もその一つの大学でした。

まともな話では面白くないので、その当時の部員が如何に「悪玉」であったかを四十年たってすっぱぬくのも一興かと思えますので。

.....

当時私の家の宿泊は、三食付で一日四円というのが最低の料金でした。ところが、私もテニスをやるので、合宿に限ってその半額の二円でした。今の方にはどの位の貨幣価値か分り悪いので想像もつかないでしょうが、その値段では、当時としても、もうけ所ではなくトントンにも追いつかず、旦那の道楽だと云われた程、商売気を離れたものであったと御想像下さい。

たしかT君がキャプテンで、部員にはK君、A君、両O君、Y君等、八、九人位が合宿に来て居た頃の二、三

年の間の事です。

私の家の女中頭にお雪（仲々の別嬪でした）というのが居て、これが大の若者好きで、合宿の諸君の云う事なら何でも聞いてしまう程に面倒を見たものです。当時の滞在の一泊と云えば、朝昼晩の三食が普通です。それが彼女をそゝのかしては、飯は喰い放題、お鉢のお代り、味噌汁、おしんこはお代り、揚句の果には夜食迄も持って来させる等、これが毎日の事ですから商売にもなにもなつたものではなかつた様です。

その他の事も一事が万事で、御想像にお任せしますが、唯さすがの彼女も、料理のお代りだけは、料理人が作るものだけにサービス出来なかつた様です。

あまつさえ、私の女房（おかみさん）までが、お茶菓

子のサービスを持って部屋に遊びに行つて居たのですから驚きです。

毎年の合宿が、こんな悪童の集りばかりであつたとは申しません。おとなしい年もありました。が、私の印象も薄く、合宿の成果もあがつたとは思えませんでした。

皆で、たわいのないいたずらをする事が、チームワークを作り、コートに出た時は真剣に練習に打込める空気を作つたとも言えると思います。

この悪者共の中から、後に、私の義理の妹の亭主が出たのだから、不思議な廻り合せとも言えるのでしょうか。

私も共に楽しくプレーさせていただいた感謝の気持で、思出をたどつて拙文を綴つて見ました。